神奈川県立総合教育センター研究集録 25:86～92.2006

小学校英語教育に関する研究

── 実践的コミュニケーション能力の育成を目指して ──

碓　井　淑　美[1]

将来、児童・生徒が英語をコミュニケーションの手段として使いこなしていくためには、「聞くこと」「話すこと」を中心とした音声による英語教育のより一層の充実を図っていくことが急務であり、小学校段階の英語教育はその基盤として重要な位置を占めている。本研究では、英語に浸ることを主としたイマージョン・プログラムに着目し、公立小学校に適用できる方策について探るとともに、ＩＴ教材の作成を試みた。

はじめに

平成 14 年度から「総合的な学習の時間」の国際理解教育の一環として始まった小学校英語活動は、現在、全国 92.1%の学校が実施（年間平均実施時間数 11～12 時間・月１回程度）している。（文部科学省　平成 16 年度「小学校英語活動実施状況調査」）

平成 15 年３月に、文部科学省は「『英語が使える日本人』のための行動計画」を策定し、その目標を、今後のグローバル化の進展の中で、英語が使える日本人を育成することとしている。また、英語をコミュニケーションの手段とするという観点から、小学校段階における学習においては、音声によるコミュニケーション能力を重視し、中・高等学校では、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の総合的なコミュニケーション能力を身に付けることを重要としている。

研究の目的

明確な指導目標が提示されないまま始まった小学校英語活動は、小学校間での取組の差や教員研修の在り方など課題が山積している。本研究ではこれらの課題を踏まえて、小学校段階における音声中心の英語によるコミュニケーション能力を培う方策について考察するとともに、教材開発を行ったものである。

研究の内容

１　イマージョン・プログラムに着目して

文部科学省は「『英語が使える日本人』のための行動計画」の中で、中・高等学校の「授業の大半を英語で行う」ことを目標に掲げた。しかし、文部科学省「英語教育改善実施調査（平成 16 年度）」によると、英語の授業の大半を英語で行っている公立中学校は約４％にとどまり、「授業の大半を英語で行う」とする文部科学省の目標には遠く及ばないことが分かった。高校では「英語Ｉ」の授業を「大半は英語でやっている」学校は 1.1%、「聞くこと」や「話すこと」を重点的に学ぶ「オーラル・コミュニケーション」の科目でも 25.1%にすぎなかった。

これらの課題を解決していくには、小学校段階からの英語教育が重要であり、とりわけ音声中心の「聞くこと」「話すこと」をより自然な形で行っていくことが重要であると考える。

現在、日本の小学校で行われている英語教育は、大きく三つの形態に分けられる。一つ目は平成 14 年度から新設された「総合的な学習の時間」の国際理解教育の一環としての英語活動、二つ目が学校教育法施行規則第 26 条の２等に基づき、現行の基準によらない教育課程の編成・実施が認められる「研究開発学校」における英語学習、三つ目が文部科学省より構造改革特別区域として認定を受けた教育特区における英語学習である。これらの三つの形態における授業の目標・内容・評価などは異なり、カリキュラムは各学校・自治体に一任されているが、いずれもコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点が置かれ、授業の内容は、歌、ゲーム、ごっこ遊び等が中心となっている。

このような歌、ゲーム、ごっこ遊び等を通して英語を習得していくこともコミュニケーション能力の育成を図る手段ではある。しかし、子どもが日常生活の実体験を通して英語表現に触れる機会があれば、自然にいろいろな分野の英語表現を身に付け、子ども自身が積極的に英語に関心を持ち、慣れ親しむことができるものと考える。そのような機会を増やすためには、学校の日常生活の中で、英語に浸る環境を整えていくことが大切なことと思われる。

ここでは、英語以外の教科においても英語を使用して授業が行われ、学校生活の大半が英語により営まれるイマージョン・プログラムに着目し、その理論を考察した。そして、４名の調査研究協力員の協力を得て、教科内容を英語で教える授業を実践・検証するとともに、教師や子どもが授業や学校生活の

1　研究開発課　研修指導主事

いろいろな場面で使える英語表現を取り入れた、ＩＴを活用した教材の開発を試みた。

2　イマージョン・プログラムについて

(1) イマージョン・プログラムとは

イマージョンとは「浸ること」を意味し、イマージョン・プログラムの意図するところは、バイリンガリズム（二か国語に通じていること）、二か国語で読み書きができることを推進することである。イマージョン・プログラムの際立った特色は、大半（50%～100%）の授業を外国語で教えることである。つまり、イマージョン・プログラムにおいては、外国語は学習する教科ではなく、教育内容を学ぶための媒体なのである。イマージョン・プログラムとは、最も徹底した、内容中心型外国語教育（Content-Based Instruction）を意味する。

(2) 小学校におけるイマージョン・プログラムの二つのタイプ

小学校で導入されている「早期完全イマージョン」と言われているものは、幼稚園、もしくは小学校第１学年から開始され、おおむね中学校段階へと継続されている。「早期完全イマージョン」では、初期の２～３年間は、授業の 100%が第二言語で実施され、その後中学校になるまで徐々にその割合を 40～80%までに減らす。子どもは読み書きを、第一言語に先んじて、第二言語で教えられる。第一言語による読み書きの学習は、第２学年ないしは第３学年までは行われない。

もう一つのイマージョンのタイプとしては､「早期部分的イマージョン」と呼ばれているもので、50%の教科が第二言語で実施され、残り 50%は、第一言語で行われるものである。「早期部分的イマージョン」は、幼稚園、もしくは第１学年から開始されるが、第一言語による読み書きが教えられた後、第二言語による読み書きの学習が始められる。どの教科を第一言語で教え、どの教科を第二言語で教えるかの選択は、その学校の判断による。

本研究のスーパーバイザーの所属する加藤学園は､「早期部分的イマージョン」を推進している。幼稚園からイマージョン・コースを設置し、小学校第１学年から第３学年までは、国語を除く全教科を英語で教えている。第４学年から第６学年までは、国語の他に、社会・芸術・音楽が日本語で教授され、理科・算数・体育・コンピュータの授業が英語で教授されている。教師は子どもに対して英語のみで接し、授業については、子どもは授業で使われる言語に応じて、指定された「英語使用教室」と「日本語使用教室」とを行き来する。

(3) イマージョン・プログラムの目的

イマージョン・プログラムの目的は、外国語を母語とする同年齢の子どもと英語で意思疎通ができるようになること、英語を使用言語とする学習環境で生活できるようになること、日本語の能力の育成も図りながら当該学年の教科内容を習得できること、日本人としてのアイデンティティーを維持しながら外国の文化を理解し尊重できるようになること等である。

3　コミュニケーション能力育成への具体的な方策

イマージョン・プログラムでは、子どもが英語に触れる時間が圧倒的に長く、いわゆる英語のシャワーを一日中浴びている状態である。

本研究では子どもが一日の大半を過ごす学校生活において、身近な英語を繰り返し聞いたり話したりすることにより、自然に英語表現を身に付ける方策として、次の３点について考察した。

- 「教科に関連した内容の授業づくり（Content-Related Instruction）」
- 「文化と関連した内容の授業づくり」
- 「日常的に英語に浸る環境づくり」

(1) 「教科に関連した内容の授業づくり（Content-Related Instruction）」

イマージョン・プログラムにおいては、ネイティブ・スピーカーが学年相当の教科内容を教授している。担任主導の授業が行われている公立小学校にイマージョン･プログラムの考え方を取り込むには、下級学年や学年相当の既習内容を扱うことで、英語による様々な表現に気付かせる方法があると考えた。小学校の社会、算数、理科、音楽、体育などの他教科の内容を英語で教えることは、言葉に意味を与え、コミュニケーションを必要とするような状況を作ることであり、これによりコミュニケーション能力が培われると思われる。担任を主体とした小学校の授業は、英語と他教科との横断的な取組を比較的容易に行うことができる。

コミュニケーション能力の向上を目指した「教科に関連した内容の授業づくり」の利点として、

- 小学校の教科内容は子どもの日常生活に関わるものが多く、英語表現と関連させることが比較的容易である。
- 教師は教科内容を把握しているので、英語表現を取り込みやすい。
- 内容が教科に関連することなので、子どもは容易に次の授業でも思い出すことができる。例えば、正方形の英語を覚えたら、正方形は算数の授業でも出てくるので、頭の中で反芻することができる。
- 子どもの英語に対する興味を維持できる。例

えば、正方形の英語が分かれば、次に長方形が出てきた場合には、それを英語で何というか知りたい気持ちになる。

・学年が上がっても、各教科とも前学年の授業がベースになっているため、学習内容の継続性・関連性が高く、習得に効果的である。

などが挙げられる。

また、教師にとって必要なことは、

・基本的な事項の単語や英語表現の知識

例えば、歴史・地理・地図の見方（社会）、数・グラフ・長さ・重さ・面積・体積・時間・温度・図形（算数）、曜日・自然・実験・観察（理科）、身近な人・物・社会・日常生活（生活）、体の部位（理科・体育）、動作・仕事・料理（図画工作・家庭・体育）、食事（給食時間）等に関する英語表現。

・身近な英語表現を繰り返し使用できる場面の設定

・授業内容の継続

小学校のカリキュラムはスパイラル方式に進むので、関連する授業は数回続く。

・体験的かつ必要に迫られた言語活動の環境づくり

などが挙げられる。

「教科に関連した内容の授業づくり」を行うに当たり留意したいことは、

・視覚教材として実物をたくさん用いる。

・子どもが実際に手で触れられるようにする。

・身の周りにある生き生きした題材を扱う。

・分かりやすく、意味のある場面を設定する。

・言い換えや繰り返しを多くする。

などである。これらは、子どもの発達段階や興味・関心に基づいて行われなければならない。

作業の進め方として、

・基本的な単語・英語表現を選択する。

・これに関連し、英語の授業として効果的な教材を選定する。

・１回の授業で完結させるのではなく、他の授業・次年度の同教科の授業との関連性を持たせた授業や教材となるように計画する。

などが考えられる。

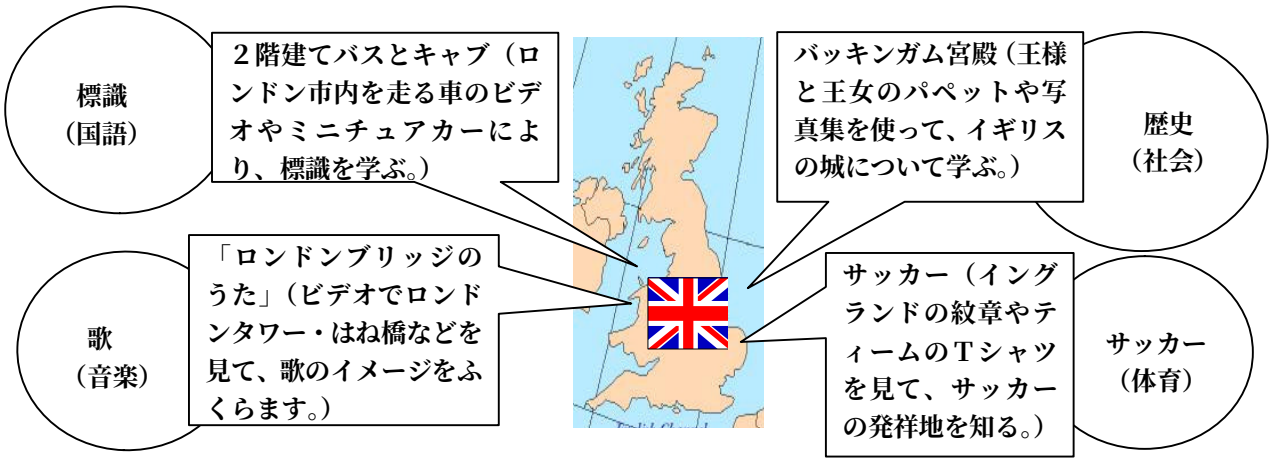
メットとローズ（Met,Rhodes　1990）は、「外語学習の集中度は好奇心によって生み出される－生徒は意味のある学習課題を達成するために自発的にことばを理解したり話したりし、またその必要を感じなくてはならない。教科内容の目標とことばや文化の指導目標と関連させて授業に集中させることが、大切な手法である」と述べている。

このように、外国語を習得する場合、実体験的な状況の中で、子どもにコミュニケーションの機会を与えていくことは、英語表現を習得していく上で大切な手法であると考える。

(2)　「文化と関連した内容の授業づくり」

小学校や中学校で外国語を学ぶ場合、子どもは日本とは異なる他国の存在に気づき、歴史・地理・文学・音楽・芸術などの文化に興味をいだき、自己の日常生活と比べながら、いろいろなことを発見する喜びが見出せると思われる。特に、子どもにとって日頃耳にするカタカナ語や身近にある絵本や食べ物などは、外国語について学ぶ上で格好の題材となり得る。他には、国旗・紋章・歴史・神話・音楽・民話・伝承的な子どもの歌・ライム（押韻詩）・ゲーム・コイン・切手・紙幣・挨拶の仕方・ジェスチャーなど、子どもが興味や関心を持つテーマは数多くある。これらを授業のなかに取り入れて、外国の文化に触れさせることは、その国の子どもたちと同じ体験をすることができるという意味でも価値あることである。

一例として、「イギリス」をテーマにして、イギリスの文化（Visual Culture）と関連した四つの授業を立案してみた。（第１図）



第１図　「文化と関連した内容の授業づくり」の一例

「文化と関連した授業づくり」を行うに当たり留意したいことは、世界地図・地球儀・写真・ビデオ等の視覚に訴える教材・教具を準備したり、カラフルなポスターや絵を教室に貼ったりする等の学習環境を整えることである。これらは子どものモティベーションを高めるのに効果を発揮するものと考えられる。たとえ包紙一枚でも、外国の絵や文字が入っているものは、子どもには新鮮に映るものである。

グラディー（Grady　1984）は、ボディーランゲージや様々な小道具、実物教材を使っていけば、それは右脳に働きかけ、言語学習のどの段階においても、学習者に情報上の刺激を与えることになると、視覚教材の重要性を強調している。

(3) 「日常的に英語に浸る環境づくり」

学校生活は、英語表現を学ぶには格好の場である。特に、小学校では担任が複数の教科を教えるということで、英語以外の授業のなかでも、英語の表現を振り返ったり、発展させたりすることが可能である。また、授業以外の時間、例えば、「朝の会」「給食の時間」「帰りの会」など、共通の話題や時間を共有することが多くあり、繰り返し英語を聞いたり話したりする機会が豊富にある。英語の表現が繰り返し使われることで自然に英語が身に付き、英語を伝達の手段として、相手の気持ちを思いやりながら自分のことも伝えていくような情意面も、日常生活のなかで培うことができるものと考える。

4　授業実践及びＩＴ教材

現在行われている小学校英語活動は、教科書がないところから出発し、英語教育の専門ではない小学校の教師が、ＡＬＴや地域のボランティアと協働しながら進めている。ＡＬＴによる指導は、年に２～３回という学校が多く、残りの授業の大半は、担任が中心となって行っている。

本研究では、担任やＡＬＴなどの授業担当者をサポートするために、先に述べたような考察に基づいた授業実践及びＩＴ教材の作成を試みた。（第１表）

(1) 授業実践

４名の調査研究協力員の協力を得て、「教科に関連した内容の授業づくり」の検証を行ったが、授業は、第２表のように、多学年・多教科にわたり実施された。授業を行うに当たり、本研究のスーパーバイザーであるマイケル・ボストウィック氏から、「英語で授業を行う場合、既習した学習内容がベースにあると理解しやすい。使用する英語はシンプルにし、場面を変えて何度でも繰り返す。説明する時はインタラクションを取り入れ、子どもに考えさせるよう心がける。子どもの興味・関心をひくように、なるべく多くの実物や視覚教材を使う。」等のアドバイスを受けた。総合教育センターでは、調査研究協力員が考案・作成した学習指導案の英訳及びそれに伴う英語の音声を録音した。３名が単独で、１名がＡＬＴとのティーム・ティーチングの形態で授業を行った。授業の大半は英語で行なわれたが、授業のビデオや子ども・教師の感想などから、子どもが授業に集中していた様子がうかがえる。これらの授業の学習指導案については、別に作成した「小学校英語教育の研究・教材集」に収録した。

(2) ＩＴを活用した教材作成

「教科に関連した内容の授業づくり」「文化と関連した内容の授業づくり」「日常的に英語に浸る環境づくり」を推進するために、ＩＴ教材を作成した。この教材の内容は、「教科に関連した学習教材編」「学校生活編」「ストーリーテリング編」の三つのカテゴリーに分かれている。(第３表・第４表・第５表) 子どもの興味・関心に応じて活用できるように、スクリプトとＣＤやＤＶＤ付きで、「小学校英語教育の研究・教材集」としてまとめた。

「教科に関連した学習教材編」(第３表)は、比較的視覚や聴覚に訴え、実体験することができる理科、音楽、体育などを対象とし、ＤＶＤ教材を６種類作成した。これらは担任やＡＬＴを含めた授業担当者の指導書として活用する他、英語のみならず各教科の授業においても、子どもが繰り返し視聴して、英語をインプットすることをねらいとした。授業では、これらのＤＶＤを活用しながら、ワークシートを使ってペア・ワークやグループ・ワークの形態で活動したり、調べたことを英語で発表したりするなどが考えられる。参考として、「小学校英語教育の研究・教材集」には、調査研究協力員による実践例と学習指導案を添付するとともに、活用方法について記した。

「英語版ラジオ体操第１」は、郵政公社の許諾のもと楽譜の提供も受け、総合教育センターのスタジオにて録画したものである。内容は、ラジオ体操で使われる体の部位や動作の説明をした後、ピアノの伴奏に合わせて、体操場面が登場するという構成となっている。英語の授業のウォームアップなどに活用することが考えられるが、調査研究協力員による実践報告によれば、教師・子どもともに好評であったとのことである。

「日常的に英語に浸る環境づくり」を推進する方策としては、教師をサポートするためのＩＴ教材「学校生活編」を作成した。

「学校生活編」(第４表)としては、二つの「英会話集」及び「カテゴリー別英単語集」を作成し

た。英会話集「Let 's Speak and Enjoy English～学校での英会話集～」は、小学校の日課となっている「朝の会」「給食の時間」「帰りの会」を英語で行うという試みであるが、それぞれの内容をＣＤ教材付きの冊子としてまとめた。

神奈川県の公立小学校では、地域によっては、外国籍の子どもが増加している。２名の調査研究協力員の学校においても、外国籍の子どもが多く在籍し、転入したばかりの子どもが日本語を十分理解できないという状況がある。そのような中で、「朝の会」等を英語で実践したところ、英語が子ども同士あるいは教師と子どもとのコミュニケーションに役立ったとの報告があった。

英会話集「Let 's Speak and Enjoy English～教師のためのクラスルーム イングリッシュ～」は、総合教育センターの研修講座で受講者からの要望が多かったことから、今回、ＣＤ教材付きの冊子としてまとめた。教師の英会話の練習用に活用できる。また、子どもが授業中に使う英語も入れたが、チャンツで練習すると、子どもはすぐに覚えるので、これも習得の一方法かと思われる。

「カテゴリー別英単語集」は、子どもにとって身近な約 200 の単語をカテゴリー別に絵と文字で並べた。コピーしてカルタやフラッシュカードを作成し、ゲームとして活用できる。ＣＤの音声付きなので、教師の発音練習に利用したり、授業でそのまま聞かせたりすることができる。

「文化と関連した内容の授業づくり」の試みとして、「ストーリーテリング」(第５表)を作成した。絵本は外国の文化の薫りのする代表的な教材であり、子どもの想像力や言語能力を伸ばすと言われる。ここでは、子どもにとって身近な絵本の題材を基に、大きな画面で見ることができるように素材をデジタルカメラで撮り、プレゼンテーションソフトウェアで作成した。ストーリーは添付されているＣＤを活用するか、ＡＬＴや担任がじかに話して伝えるかする。プレゼンテーションソフトウェアは動画のように画面が流れていかないので、スライドを止めて子どもの興味に合わせて話したり、スライドを入れ替えて話したり、子ども自身がコンピュータを操作したりと、いろいろな活用方法が考えられる。

総合教育センターの「カリキュラム・コンサルタント」に教材の提供を依頼してきた小学校で、「Little Red Riding Hood（あかずきんちゃん）」を２年生に見せたところ、次のような子どもの感想が寄せられた。

・先生がパソコンでやったので、映画みたいでおもしろかった。
・プロジェクターから、あかずきんやおばあちゃんが出てきました。狼も出てきました。狼がグルッと回った時、みんながオッと叫びました。
・おばあちゃんは“グランドマザー”っていうと思っていたのでＡＬＴの先生に聞いたら、“グランドマザー”を短く言うと、“グラニー”っていうのだと分かった。それに、今日は英語で“だいだい色”を言えて、うれしかった。

また、担当した教師からは、「投影された画面が大きく動きがあったので、子どもが授業に集中していた。高学年でも内容をアレンジして挑戦したい。」という感想が寄せられた。

プレゼンテーションソフトウェアを活用したＩＴ教材としては、ストーリーテリングだけでなく、子どもの興味・関心に応じて学校周辺や身近な人物をデジタルカメラで撮り、オリジナルのストーリーを作成していくことも効果があると思われる。

これらのようなＩＴ教材は、第１表に示した内容で、「小学校英語教育の研究・教材集」としてまとめた。

第１表　「小学校英語教育の研究・教材集」内容

その１	調査研究協力員による教科に関連した授業づくり（第２表）
その２	教科に関連した学習教材編（第３表）
その３	学校生活編の内容（第４表）
その４	ストーリーテリング編の内容（第５表）

第２表　調査研究協力員による教科に関連した授業づくり

学年	教科	内容
１　年	国語	「おおきなかぶ」
	算数	「10 までのたし算」
３　年	社会	「地図を描こう」～学校周辺の建物～
	算数	「オープン・アプローチを使ったかけ算」
４　年	体育	「ボールを使った運動」「ストレッチ体操」
	図工	「自分の顔を描こう」
５　年	理科	「天気予報」「モビールを作ろう」
	家庭科	「サンドイッチづくり」
	音楽	「弦楽器について学ぶ」

第３表　教科に関連した学習教材編

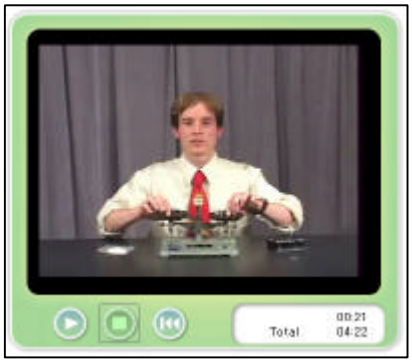
学年	教科	内容（スクリプト・ＤＶＤ付き）
５　年	理科	How to Use a Balance 「上皿てんびん」 （ALT 解説）　＊学習指導案添付
５　年	理科	How to Use a Funnel　「ろ過」 （ALT 解説）
５　年	理科	The Solar System　「太陽系」 （ALT 解説）
３　年	理科	Magnets　「磁石」 （ALT 解説）
全学年	音楽	The Strings　「弦楽器の紹介」 （ALT と演奏者が紹介） ＊学習指導案添付
全学年	体育	English Radio Exercise No.1 「英語版ラジオ体操第１」 （ピアノ伴奏付き。体の部位・動作の説明・体操の構成となっている。授業や日常生活のなかで、ウオーミングアップとして活用する。）

第４表　学校生活編

題名	内容及び活用方法（スクリプト・ＣＤ付き）
「Let 's Speak and Enjoy English」 ～学校での英会話集～	「朝の会」「給食の時間」「帰りの会」で使われる英語表現の他に、メニューなど関連する単語を掲載。教師や子どもの英語の練習に活用する。
「Let 's Speak and Enjoy English」 ～教師のためのクラスルーム イングリッシュ～	ＡＬＴとの打ち合わせや教室で指示するときの英語・子どもの使う英語などを掲載。教師・子どもが英語の練習に活用する。
「English Word Cards」 ～カテゴリー別英単語集～	18 種類・216 単語を絵と文字で掲載。コピーし、切り取って、カルタやフラッシュカードを作成し、ゲームなどに活用する。

第５表　ストーリーテリング編

題名	内容（スクリプト・ＣＤ付き）
「Little Red Riding Hood」 （あかずきんちゃん・中級用）	ストーリー（グリム童話）を基に作成。
「The Cock and the Fox」 （めん鳥ときつね・中・上級用）	ストーリー（イソップ物語）を基に作成。
「The Wolf and the Seven Kids」 （七匹の子ヤギ・初級用）	ストーリー（グリム童話）を基に作成。



第２図「上皿てんびん」のＩＴ教材

第３図「The Strings～弦楽器の紹介～」のＩＴ教材

第４図「英語版ラジオ体操第１」のＩＴ教材

第５図「クラスルーム イングリッシュ」の表紙の一部

第６図「あかずきんちゃん」のＩＴ教材

研究のまとめ

本研究は、小学校段階における「音声」中心の英語によるコミュニケーション能力を培う方策について考察してきたが、それに基づく授業実践から次のような成果が得られた。

その一つ目は、他教科の内容の授業が英語で行なわれた結果、子どもが「聞くこと」に集中したことである。当初は、他教科の内容を英語だけで進めていく授業に子どもがどう反応するのか多少の懸念もあったが、どの学年・どの授業においても、日本語の説明がないことが、子どもが英語による説明にじっと耳を傾けることの要因となった。調査研究協力員から、「イマージョン・プログラムの良いところは、よく聞かないと次の行動に移ることができないので、子どもがこちらからの話に集中して聞こうとしたことだ。」という感想があった。

１年生と３年生で行われた「算数」では、子どもは教師が予定していた以上の問題数を解答した。４年生の「図画工作」や「体育」では、子どもは繰り返し指示する教師の英語に迅速に反応し(ＴＰＲ：トータル・フィジカル・レスポンンス)、教科及び英語の両方のねらいを達成した。また、５年生のような高学年になると一層アクティブに「聞くこと」に集中し、授業の後半に行われた「天気予報」の発表では、ＩＴを活用しながら活発に行った。子どもの感想から、「聞くこと」で内容が理解できたこと、理解できたことを伝達できたことに、英語を学ぶ喜びや驚きを覚えたことがうかがえる。

二つ目は、子どもが「聞くこと」に集中するためには、教師は、子どもが「なるほど」と思えるような授業の工夫をすることが必要であることが確認できたことである。初めて出会う英語表現も、図表・絵・数字などを提示したり、教師がジェスチャー・声・表情を変えたりすることで、子どもの想像力をかきたてることできる。授業実践の「地図を描こう」では、学校周辺にある建物の写真や実際の地図を使用し、また、「天気予報」では天気図や雲の動きを見るのに大きなスクリーンを活用したが、このような本物の教材・教具は、子どもの興味をひき、実感を伴ったコミュニケーションをする上で、大きな役割を果たした。

三つ目は、「教科に関連した内容の授業づくり」を推進していくためには、教師が日頃から「この題材は英語に使える」「これは英語で何と言うのか」という視点を常に持つことの大切さが分かったことである。

調査研究協力員から子どもは英語が大好きであるという報告があったが、教師自らも日頃から国旗・世界地図・絵本・辞典･外国の教科書・タイムリーな話題が載った外国の新聞を用意するなど、英語に対する興味や関心を示すことが大切であり、そのことが子どものモティベーションを大いに高めていくものであると考える。

ボストウィック氏は、授業実践の感想として、次のように述べた。「教科に関連した内容の教授は、内容が学習者にとって興味深く、本物（真実）である時、最も効果を発揮する。そのためには、早い段階から語彙や挨拶のような簡単な英語を教える必要がある。子どもは英語をチャンク（日常会話でよく使われる表現）として覚え、覚えたチャンクを組み立てながら、コミュニケーションへとつなげていく。教科と関連した授業を成功させるためには、十分な計画と準備、教師と生徒間のインタラクションが要求され、教師の優れた、創造的なアイディアが不可欠となる。また、Put・Take・Look 等の頻繁に使用される言葉、つまり、覚えてほしい言葉を『朝の会』のような日課で繰り返し使うことが重要である。今回の取組は言語と内容を統合した良い授業となった。」

今後の課題としては、より効果的な教材の開発、子どもの意欲を高める授業づくりの推進等、教師に対するサポートを一層充実していくことが挙げられる。

おわりに

今回は、コミュニケーション能力を培う方策として、イマージョン・プログラムの手法を参考に、英語の音声を中心とした指導の在り方について考察し、それに伴うＩＴ教材の作成を試みた。次年度は、これらをより効果的なものに改善していくとともに、カリキュラムとして体系化し、教材の開発を進めていく予定である。

最後に、本研究を進めるに当たり御指導・御助言を賜ったマイケル・ボストウィック氏並びに御協力いただいた調査研究協力員の皆様に厚く感謝申し上げる。

[調査研究協力員]

相模原市立東林小学校　原　啓子
南足柄市立福沢小学校　中村　有佐
大和市立渋谷小学校　山本　明彦
横須賀市立鴨居小学校　稲永　純子

［助言者］

学校法人 加藤学園　マイケル・ボストウィック

引用文献

H.カーテン/C.A.B.ペーソラ著・伊藤克敏ほか訳 1999 『児童外国語教育ハンドブック』大修館 p.156

参考文献

マイケル・ボストウィック 2000 「日本におけるイマージョン教育」（山本雅代編 『バイリンガルの世界』大修館）

Grady, Michael P. 1984 *Teaching and Brain Research : Guidelines for the Classroom.* New York: Longman

Helena Curtain/Carol Ann Dahlberg 2004 *Language and Children Making the Match* Boston: Pearson Education, Inc.